

七月の終わりで、夏休みだった。私は中学二年生だった。その日の朝も、八時半に起床した。毎日だいたい同じ時間に目が覚めた。暑さと尿意で寝ていられなくなるからだった。

排尿のあと、台所へ行つて顔を洗った。戸棚から食パンを二枚取った。トースターで軽く焼いて、マーガリンをたっぷり塗って食べた。台所のテレビで「夏休みこども劇場」を見ながら、インスタントコーヒーを二杯飲んだ。古びた扇風機がガタガタと耳障りな音を立てていた。母親は朝早くから仕事へ出ていて、家には私ひとりだった。父親はずっと以前に死んだ。私に兄弟はない。

外階段を駆け上がってくる音が聞こえた。壁の時計を見ると、十時だった。私がテーブルから立つと同時に、玄関のドアが開いた。

「なーかーむーらーくーん」と、節のついた音で私の苗字が呼ばれた。私は玄関へ出た。台所から玄関までは三步の距離だった。

石井健児が立っていた。私が「おお」と言うと、健児も「おお」と返した。それから私の姿を見て、「なんやねん、まだ寝巻き着てるやんけ」と言った。「せやねん」と、私は答えた。

「はよ着替えてこいや」

「おお。ちょ待つといて」

言い置いて私は奥へ下がった。私は布団の足もとに落ちていた昨日の服をそのまま着た。ズボンの尻ポケットにナイロンの財布を突っ込んだ。玄関に戻るともう健児の姿はなかった。

外へ出ると強烈な日差しに目がくらんだ。まだ午前中だというのに、殴られるような暑さだった。ぎよつとするほど近くから蝉の鳴き声がした。

文化住宅の赤錆の浮いた鉄階段を下りた先に、健児が待っていた。太陽から避難するように日かげに立っていた。目を細めて私の顔を見た。

「武器持ってきたか？」と健児が聞いた。

「持ってきてない」と私は首を振った。健児は口をくにやりと曲げた。あきれた様子をあらわしたのかもしれない。

「まあでもそんな気いしたわ。お前ってそういうやつやわ」

「せやで」と私は言った。健児は笑った。しかし私は一応の弁明をすることにした。

『富永しばくことにしたから』『あした行くから』『直人もいちお武器用意しといて』

昨日の電話で健児は私にそう告げたのだった。電話を切るとすぐ、私は武器になりそうなものを求めて家の中を見て回った。しかしこれといったものを見つけないことができなかった。まさか包丁を持ち出すわけにもいかないだろう。

「お前バットどうしたん？ バット持ってたやんけ」

私の言い訳を聞くと、健児はすぐにそう言った。

私は小学生の頃にソフトボールのチームに入っていて、もらいものの金属バットを所有していた。健児が言っているのはそのことだった。だが父親が死んだときにチームを辞めた。傘立てに突っ込んだまま放置していたバットもいつのまにか消えていた。たぶん母親がどこかへ処分したのだろう。

「あのバットもうないねん。いとこにあげてん」

適当なことを言った。じつのところ私はいとこの顔さえも知らなかった。

「じゃあないな。途中でなんか買うか」

「うん」と私が答えると、

「おれはこれやで」

健児は腰に巻いているポーチのジッパーを開けて、何か黒い棒状のものを取り出した。細身の懐中電灯のような大きさと形状だった。

「見てて」

奇妙に厳粛な面持ちで健児はその棒を頭の上に振り上げた。そして、下方へシュッとひと振りすると、棒は一瞬にして三倍ほどの長さに伸びたのだった。

「本物の警棒やで」

健児は得意気に私の顔を見た。

「へー、すごいやん。こんなどこで売ってるん？」

「知らん。通販ちやう？ にいちゃんの部屋にあってん」

「勝手に持ってきたんか？」

「せや」

「やばいやん。どつかれへん？」

「だいじょぶやって。どうせ気いつけへんわ。あほやから」

私たちはすぐ横の駐輪場まで並んで歩いた。健児の深緑色の自転車は陽光をまともに受けてキラキラと光っていた。健児は鍵を差し、サドルに尻を乗せた。「あっつ！」と叫んだ。「けつ燃える」と言った。私は笑った。

健児は器用に脚を使いながらバックで駐輪場から出た。首を回して私の方を見た。私は歩いていって、健児の自転車の荷台にまたがった。荷台は熱くなかった。健児のように声を上げる必要はなかった。私は自分の自転車を持っていなかった。前年の夏に市民

プールで盗まれて、それっきりだった。

「駅の方行くで」と健児が言った。私は健児の腰に手を添えた。自転車はゆるやかに進み始めた。

道中、健児は最近熱中しているファミコンゲームの話をした。「終わったら貸したるわ」と言った。富永の話は出なかった。自転車は川を渡った。五分ほど行くと駅前だった。そこには大きなスーパーのほかに、昔から続く商店街もあった。暑さのせいか人通りは多くなかった。スポーツ用品店の前まで来て健児は自転車を停めた。私たちは店に入った。

小さな店だった。数は多くなかったが、木製や金属のバットが何本か立てかけられ並んでいた。健児と私は一本ずつ見ていった。一番安いものでも、七千円の値札がついていた。私の財布に紙幣は一枚も入っていなかった。

「高いな」と健児が言った。「高い」と私は言った。

店の主人らしき中年の男が近寄ってきた。「バットか？」と健児に聞いた。「はあ」と、健児が答えた。店主は笑みを浮かべた。

「にいちやん、ポジションどこや？」

「一塁です」と健児は言った。「四番です」と続けた。健児は一年のとき陸上部にいたが、二学期で辞めていた。私の知っている限り、野球もソフトボールもやったことはなかった。

「そうかー」となるように言ったきり、店主にそれ以上の言葉はなかった。黙って私たちを見ていた。健児も何も言わず、私も黙っていた。私たちはもうバットを見ていなかった。私たちは店を出た。

「あそこは？」と健児があごをしゃくった。ななめ向かいに金物屋があった。「おお」と私は言った。私たちはそこまで歩いた。

入口が狭いわりに、奥に向かって細長い店だった。強い日差しに慣れた目に、店内はひどく薄暗く感じられた。商品は棚だけでなく、通路に置かれた木箱にもあふれていた。おおかたの物は、埃をかぶっていた。

健児が木箱から金槌を一本抜き取った。持ち手に青いゴムの巻かれた金槌だった。

「これええやん」と健児は言い、私に差し出した。私はそれを受け取った。たしかに握りやすく、振り下ろしやすそうな金槌だった。

「いくらかな？」

私は値札をさがした。金槌に値札はついていなかった。木箱にも、何も書かれていなかった。

「聞いてこよか」と健児が言った。私たちは店の奥へ進んだ。カウンターの向こう、一

段高くなったところが畳敷きになっていて、テレビがついていた。ちゃぶ台の上に湯呑みがあり、座布団があった。人の姿はなかった。

「すいませーん」と、健児は奥に向かって声をかけた。しばらく待ったが、返事はなかった。

「……おらんわ。行こ」

健児と私は踵を返して、出口へ向かった。途中で金槌を木箱へ戻そうとした私を、健児が止めた。

「あほ、なんで返すねん。ポケット入れとけや」

言われるまま、私は金槌をズボンのポケットに押し込んだ。柄の先がポケットから飛び出したので、シャツのすそで隠した。

店を出て、また自転車に乗った。急いでその場を離れた。荷台から振り落とされないよう、私は健児の身体にしがみついた。健児が笑い出した。私も笑った。

「腹へったな」

商店街の外れまで来たところで、健児がペースをゆるめた。「お前へれへん？」

私は空腹を感じていなかった。「へった」と、私は答えた。

「うどん行こや。おごったるわ」

私たちは川の方へ少し戻ったところにあるうどん屋へ入った。健児と一緒に、何度か来たことのある店だった。店内は冷房が効きすぎて寒いくらいだった。

健児は肉うどんを注文した。私も同じものにした。「おにぎりもええで」と言うので、ガラスケースに並んだおにぎりをひとつ取った。二人席に着いた。狭いテーブルだった。額をくっつけるように向かい合ってうどんをすすった。

「おもしろかったな」

井から顔を上げて、健児が言った。「おお」と、私は言った。

「見してや。ハンマー」

私はポケットから金槌を抜き、テーブルに置いた。健児はそれを手に取り、眺め、振り下ろすまねをしてから、返してよこした。私も健児がやったように、眺めて、軽く振ってみた。何でもなかった。ただの金槌だった。

「そういえば」と、健児が言った。

「商店街に、瀧本おったで」

「瀧本？」と私が聞くと、「瀧本順子」と健児が答えた。

「どこに？」

「本屋の前」

「うそ」

「ほんま。逃げてくるとき、見たわ」

「本買ったんかな？」

「知らん」

「何買ったんかな？」

「エロ本やろ」

私たちは笑った。

「お前、瀧本のこと好きなんやろ」

ひとしきり笑ったあとで、おにぎりを手にしたまま健児が言った。私は瀧本順子のことを好きではなかった。私は健児が瀧本のことを好きなのを知っていた。

「好きちやうわ」と私は言った。

「うそつけ」

「うそちやうわ」

「でも瀧本かわいいよな」

「かわいい」

「やっぱ好きやんけ」

「好きちやうわ」

私たちはうどん屋を出た。途端に熱い空気に包まれた。毛穴から汗が噴き出すのがわかった。

自転車は川沿いの道をのろのろと走った。健児は急にしゃべらなくなった。私も口を開かなかった。富永の家へ向かっているようだった。私も健児も、富永の家へ遊びに行ったことがあるので、場所は知っていた。

私は健児の腰に腕を回して、あのときの健児の泣き顔を思い出していた。放心したように口を開けた富永の前で、顔をくしゃくしゃにして、うーっ、うーっ、と、苦しそうな声をもらしていた。両方の手を、血が出そうなほど握りしめていた。昼休みだった。教室には半分ほどの生徒が残っていて、その中に瀧本順子もいたのだった。「かわいい」と瀧本がつぶやくのが、すぐそばにいた私には聞こえた。私は瀧本に聞こえるように、大げさな舌打ちをした。そういうたことごとを、健児が知ることはないだろう。

川を離れて、建売の一軒家が立ち並ぶ住宅街に入った。光はほぼ真上から照りつけていて、日かげはなかった。どの家もどの家も白く輝いていた。正午のサイレンがどこかで鳴り始めた。

自転車が停まった。富永の家の前だった。私たちは自転車から降りた。富永の家は角地にある庭付きの二階家だった。

「平日は親おらんはずやねん」

敷地と道路を隔てる鉄扉から向こうを覗くようにして、健児が言った。

「ほんまに？」と私は聞いた。

「たぶん」と健児は言った。「もし親出てきたら、走るから」

健児はボーチから警棒を取り出した。短い状態のまま右手に提げ、左手でインターホンのボタンを押した。ピンポン、と家の中で音が鳴るのが聞こえた。私は健児の自転車を支えて立ち、いつでも逃げられる態勢をつくっていた。金槌はポケットに入れたままだった。

しばらく待った。ひどく静かだった。インターホンから返答はなく、玄関のドアも開く気配を見せなかった。静かなのは富永の家だけでなかった。この地区全体に人氣が全然ないのだった。

健児はもう一度ボタンを押した。結果は同じだった。富永の家からは何の反応もなかった。

「おらんみたいやな」と私は言った。「自転車ないもんな」

「うん」と健児はうなずいた。しかし納得のいかない様子だった。家のあちこちに視線を送っていたが、

「裏まわってみよか」

突然そう言って、家の敷地を囲む石塀に沿って歩いていった。私は自転車を押してそのあとにしたがった。

家の裏手には大きな掃き出し窓があった。そこは塀からの距離が近く、カーテンも引かれていなかった。塀に手をかけて少し背伸びすると、中の様子がよく見えた。

「なんかおる」と健児が言った。

畳に敷かれた布団に、背中を向けて寝そべっている人がいた。水色の浴衣のようなものを着ていて、タオルケットが腰から下にかかっていた。真っ白な頭髮のそこかしこに、土色の地肌が透けて見えた。

「誰やろ」と私は言った。

「富永のおじいちゃんやろ」と健児は言ってから「おばあちゃんかな？」と疑問を呈した。

実際、男なのか女なのか、わからなかった。老人であることだけが、はっきりしていた。

「前に来たとき、おったか？」

「おらんかった」

以前来たときに入ったのは、リビングと、富永の部屋だけだった。私たちは富永と、その母親としか顔を合わせなかったのだ。

私たちはいつとき、その老人を眺めていた。老人は背中を向けたまま、ほんのわずかな身動きもしなかった。依然として辺りに人影はなく、石塀越しに家の中を覗いている二人組がいても、見とがめられることはなかった。

と不意に、何か聞こえたような気がしたのだった。それはどこか遠くで、ガラスを弱くゆっくりひっかいているような、不快で、かすかな音だった。その音が老人の発する声だと気づくのに、やや時間がかかった。

「なんか言うてる」と私は言った。

健児は「おお」とだけ答えた。私たちは二人で耳を澄ました。老人は何度も同じ言葉を繰り返しているようだった。私たちの耳は、老人の言葉の輪郭を、徐々に明瞭に捉え始めた。

「……おかあちゃーん……おかあちゃーん……」

老人は、今にも消えそうな声で、しかし執拗に、そう繰り返していたのだった。

「いこか」と健児が言った。視線は老人に向けたままだった。

「うん」と私は答えた。

健児がサドルにまたがり、私はまた荷台に乗った。自転車はゆっくりと走り出した。

「やばかったな」

富永の家をかなり離れてから、健児が楽しそうな声で言った。「やばかった」と、私は復唱した。

日差しは容赦なく照りつけ、私たちの行くアスファルトの道を焼いていた。しかし勢いよく走っているときは風が当たるぶん、暑さは少しましだった。

自転車は住宅街を抜けた。急に人通りが多くなった。

健児はゲームセンターの前で速度をゆるめた。私が荷台から飛び降りると、健児は駐輪場に入ってゆき、自転車を停めた。私たちはゲームセンターに入った。急に視界が暗くなった。煙草のにおいがした。涼しかった。電子音が渦巻き私たちの耳を圧迫した。

「一時間くらいしたら、もっかい見に行ってみよ」

健児が顔を近づけ、声を張り上げた。私はうなずいて返した。しばらくすると目が暗さに慣れてきた。客入りはいつもより少ない気がした。富永の顔はなかった。そこで富永に会ったことはなかった。

健児は千円札を両替し、その頃流行っていたゲームの台に硬貨を入れた。それは二人同時にプレイできるゲームで、健児はちらっと私を振り返ったが、私は加わらなかった。私は店の隅の自販機で缶コーヒーを買って、ちびちび飲みながら健児のプレイを眺めた。健児は大概のゲームが得意だった。そのときも、百円玉一枚でいつまでもプレイしていた。私はコーヒーを手に店の中をぶらぶら歩いて、他人のプレイや、デモ画面など

を眺めて回った。ゲームセンターに来て、私はあまりゲームをしなかった。おおかたこんな風にして時間を過ごした。

やがてそういったことにも飽きてきて、私は近くの椅子に座った。そして気まぐれに目の前の台へ硬貨を投入した。何度かやったことのあるゲームだった。ポケットに入ってたままの金槌のせいでひどく座りにくかった。

私はゲームであれスポーツであれ、反射神経の鋭さを要求される行為はおしなべて苦手だった。ゲームオーバーの画面を見つめながら、残り少ないコーヒーをひとくち飲んだ。私の右肩に手が置かれる感触があった。

「ほんま下手やな」

いつからいたのか、振り返ると健児が立っていた。口もとに笑みを浮かべていた。硬い笑顔に見えた。

「おれ、帰るわ」と健児は言った。

「え、帰るん？」と私は聞いた。

「うん、帰る」と健児は繰り返した。

「お前、まだここおるやろ？」

そう言われて、私は「おお」と答えた。

やや間があった。健児は何か言いたそうに見えた。結局は何も言わなかった。「ほな」と片手を上げて背中を向け、そのまま出口の明るみへ消えた。

私は健児がさつきまでやっていたゲーム台のところへ行った。椅子に座り、硬貨を入れて、プレイした。またすぐにゲームオーバーになった。私はコーヒーを飲み終えた。立ち上がって自販機の横の缶入れに捨てた。壁の時計を見た。午後一時だった。私はゲームセンターを出た。

外は依然として燃えるような暑さだった。しかし不快ではなかった。健児の自転車は健児とともに消えた。私は歩くしかなかった。私は歩き始めた。来た道を戻り、富永の家へ向かった。私には富永の家へ行く理由は全然なかった。

十五分かかって、富永の家に着いた。門が開いたままになっていた。さつきはなかった黒い自転車有家屋の横手、日かげになった場所に停まっていた。

私はインターホンを押さなかった。石塀に沿ってまた裏へ回った。掃き出し窓のところまで行くと、部屋の中に老人の姿が見えた。

老人は寝ていなかった。布団の上に、あぐらをかいて座っていた。窓の方を向いていたので、私と正対する格好になった。老人は何も身に着けていなかった。まったくの裸だった。くしゃくしゃと丸められた浴衣が、畳の上に落ちていた。老人が男性であることがわかった。



老人の上半身からはすっかり肉が落ちきり、あらわな骨格の上に、水気のない皮膚が、重力のなすがままにたるみながら、無造作に張り付いていた。その皮膚のところどころから、老人の頭髮と同じような白く力のない毛が、何の規則性もなく飛び出していた。それとは対照的に、あぐらをかいた下半身は、ひどく肉感的なのだった。太ももにはしっかりと筋肉がつき、若者並みとはいえないまでも、壮年の男性と遜色なかった。その上、股間から内ももにかけては、黒く太い毛がふさふさと豊かに生えていた。その黒ぐろとした体毛の中心に、銭湯などでもちよつと見たことがないくらいに大きな男性器があった。

古い樹木の根っこのようなゴツゴツした質感のその大きな塊から目をそらすのには少しの努力が必要だった。私が目を上げると、老人もまた私を見ていた。私と老人はしばらくの間、見つめ合った。老人は子どものようにまん丸く目を見開き、熱心に私の目の奥を覗き込もうとしていた。私はそこから立ち去った。家の表に戻った。

家の中から、テレビらしき音がかすかに聞こえていた。私は開いている門から敷地に入った。自転車のところへ行った。鍵はささったままだった。私はそつとスタンドを戻し、できるだけ音を立てないように自転車を押して、門から外へ出た。

私は振り返った。家から誰かが出てくる様子はない。私は自転車にまたがり、ペダルに足を置いた。サドルの位置が低すぎると感じた。急いでその場を離れた。

私は川へ向かった。住宅街を抜けてからは、ゆっくりと走った。土手に上がる道があった。急な坂になっているので、私は自転車を降りて、押しながらのぼった。

土手の上上がった途端、あたりが陰った。雲が出てきたようだった。川から風が吹いてきて、火照った身体に心地よかった。

私は土手の際ぎりぎりまで自転車を押して歩いた。そこで立ち止まり、土手下を見下ろした。背の高い草が、水際までぼうぼうと繁茂していた。周りには誰もいなかった。私は勢いをつけて、自転車を前へ押し出した。自転車は乗り手のないまま土手を進み落ちていった。しかしそれは川へ到達することなく、途中でバランスを崩して横倒しになった。倒れたあとも、草むらからのぞいた後輪だけがカラカラと虚しく回り続けていた。私はポケットから金槌を取り出した。柄を軽く握って、後ろへ振りかぶった。そのとき太陽が出てきて、急にまぶしくなった。私は倒れた自転車へ向けて、力いっぱい投げつけた。金槌は勢いよく縦に回転しながら、しかしあらぬ方へ飛んでゆき、丈高い茂みの中へ音もなく消えた。

(了)